

台湾と琉球諸島のカエル類における鳴声の種特異性

倉本 満 (福教大・生物)

Species-specificity in anuran mating calls from Taiwan and the Ryukyu islands

MITSURU KURAMOTO

台湾および琉球諸島に分布するカエル類の鳴声をサウンドスペクトログラフによって分析した。対象とした種は台湾のシナアマ、ハナサキ、クール、ラトーチ、トラフ、ギンサー、ニホンカジカ、ムクアオ、タイペイアオ、シロアゴ、ヒメアマ、琉球のハロウェルアマ、リュウキュウアカ、ハラブチ、ヌマ、イシカワ、ニホンカジカ、オキナワアオ、ヤエヤマアオ、アイフィンガー、ヒメアマの合計4科19種である。鳴声の比較から次の結論が得られた。

1. 各種は鳴声持続時間、パルス群の構成、パルス反復率、優位周波数、ハーモニックス、周波数変調のパターンなどに関してそれぞれ異なり、明瞭な種特異性を示す。すなわち各種は異なる鳴声ニッチェを占めており、このことは鳴声が種を認知する信号として極めて重要であることを裏付けている。

2. 鳴声からみるとハロウェルアマはシナアマよりもニホンアマに似ている。ヤエヤマアオは八重山諸島と台湾に分布するとみなされていたが、両集団の鳴声は基本的に異なっており、後者に対して最近与えられたタイペイアオの名は正当と思われる。ヤエヤマアオはオキナワアオの亜種とは考え難い。

3. ニホンカジカ、ヒメアマの台湾と琉球の集団には、鳴声特性に関してかなりの差が認められた。八重山諸島のヌマは鳴声のみでなく体の大きさや生態の点で周辺の集団と異なる。これらの分類学的取扱いについては別の面から検討する必要がある。

4. イシカワとハナサキの鳴声は特異な周波数変調を示す単一パルスよりなる。このような特殊な鳴声は、繁殖場所(溪流)の音響的環境に関して適応的变化を遂げた結果とみなすことができる。

伊豆半島のオカダトカゲ

疋田 努 (京大・理・動物)

Okada's skink, *Eumeces okadae* from Izu Peninsula

TSUTOMU HIKIDA

伊豆半島(下田、熱川、伊東)と伊東沖の初島から得られたトカゲを本土のいくつかの地域のニホントカゲ、および伊豆諸島のオカダトカゲ種群と比較検討した。比較は従来鑑別形質として重視されてきた幼体時の体色パターン、胴中央部の体鱗列数、後鼻板の変異について行なった。

幼体の体色パターンは一般にオカダトカゲ種群では退化の傾向が認められる。伊豆半島部のトカゲは本土のニホントカゲや、伊豆大島のオカダトカゲ同様、完全な幼体時体色パターンを示したが、初島のものは、利島-神津島のオカダトカゲと同じく、幼体時に既に頭部の二叉線が失われていた。

体鱗列数は初島でも半島部でも24-26列で、ニホントカゲと比べてもむしろ少ない方へ傾いている。この点で、一般に体鱗数の多い伊豆諸島のオカダトカゲ種群とは異なる。

後鼻板の変異には5つの型が認められる。A型は前頬板、後鼻板の他に後後鼻板(仮称)の存在するもので、最も原型的な型と思われる。B型は後2者の癒合、C型は前頬板と後後鼻板の癒合、C'型はC型の後鼻板の大型化、D型は3つの鱗板がすべて癒合したものと考えられる。ニホントカゲでは北海道産を除き、C型がほとんどを占め、他の型の出現頻度は極めて低い。しかし、伊豆半島ではオカダトカゲ種群と同じく、B型の出現頻度が高く、半島部のもの神津島、初島のものは伊豆大島・利島と似た変異分布型を示す。

上記の様に、この地域のトカゲは、後鼻板の変異分布、幼体の体色から、ニホントカゲよりむしろオカダトカゲ種群に近縁なものと考えられる。